が主催し、盛岡、花巻、北上市に避難している町民を招待。49人が参加。碇川豊町長があいさつ。「ビンチをチャンスととらえてまちづくりを進めている。故郷に戻ってきてほしい」

▼小鎚神社宵宮祭

【午後6時30分】小鎚神社で宵宮祭始まる。郷土芸能団体が境内の広場と拝殿前に分かれて演舞。観客が二重三重に囲んで見守る。参道前の道路には夜店も出てにぎやか。

【午後9時15分】安渡虎舞を最後に演舞終了。

▼小鎚神社神輿渡御

◇9月21日

【午前8時】この日も快晴。神輿の担ぎ手は約100人。背の高さで2班に分かれる。担ぎ手の背の高さがばらばらでは担ぎづらい。社人会から「4年ぶりに川に入る。足元に気を付けて」「神輿から手を離さないように」「つらくなった交代させるから手を挙げて」と注意。

【午前8時30分】ご神体を本殿から神輿に乗せる。

【午前8時50分】記念撮影後、2基の神輿出発。「役場」「桜木町」「臼澤伝承館」「花輪田」などの御旅所を経由して小鎚川に入り、神社に戻るコース。

【午前10時30分】「おおつちまつりで会いましょう！」に参加した花巻市の小林敏子さん（72）は、町役場で臼澤鹿子踊、中須賀大神楽を鑑賞し、「太鼓、笛の音が心にしみた。故郷が懐かしく涙がこぼれた」。

【午前11時】神輿は桜木町へ。多くの人たちが道端で神輿を迎え、手を合わせたり、清めの塩やお花代を手渡したり。八幡幸子さん（63）は「復興がなかなか進まないが、祭りで元気づけられる。早く、まちが活性化してほしい」。

【午後4時】小鎚川着。両岸と小鎚川を見下ろす橋の上に見物人が鈴なり。向川原虎舞と大槌城山虎舞が舞った後、入水。

【午後4時40分】2基の神輿が川の中を行きつ戻りつし、出水。

【午後4時50分】神社着。2基の神輿が競い合うように境内を走りまわる。

【午後5時35分】ご神体を本殿に移す。長い一日を終え、笑顔で握手を交わす人、こみあげてくる涙をぬぐう人。川に入ったため、担ぎ手の衣装は泥だらけ。社人会は三本締めで締めくくる。

金澤神楽
広く踊り手求めて危機脱す

金澤神楽は大槌町金沢地区に古くから伝わる郷土芸能です。震災前、後継者難で存亡の危機を迎え、踊り手を女性や地区外に広げて窮地を脱しました。大槌まつりでは、人目を引く真っ赤な上衣で、華麗な御神楽（鶏舞）を披露しました。

かつて踊り手は男性が中心で、金沢地区のみで伝承されてきました。20人ほどいた踊り手は震災前、4人にまで減ってしまいました。「神楽を守れ」。男性や地区内にこだわらずに広く踊り手を求め、現在、メンバーは15人にまで増えました。踊り手は全員女性です。

愛好会から保存会に名称を変え、今年4月には町郷土芸能保存団体連合会にも加盟しました。

会長は町方出身の大久保正人さん（59）。「せっかく伝承されてきた神楽を途絶えさせたくなかった」。神楽を指導する太田未彩希さん（27）は祖父から手ほどきを受け、2、3歳の時から舞い始めました。「神楽の演目は12あるが、継承されているのは2演目。もっともっと演目を増やしていきたい」

国立民族学博物館教授　池谷和信さん（55）

「生活に密着し根付く郷土芸能」

鹿子踊が群舞したドロノキ植樹祭＝4月27日、新山高原

「臼澤鹿子踊を中心に大槌町内の郷土芸能を調査しています。鹿子踊のたてがみに使われるドロノキの植樹が今年4月にあり、町内にある鹿子踊5団体が協力し合いました。これは画期的なことで、個々の団体の踊りから、町の踊りになったことを意味します。復興に向けて、地域をつなぎ、世代をつなぎ、町の宝ともいうべき存在になっているのではないでしょうか」

「大槌町の郷土芸能は、鹿子踊に限らず、大神楽も虎舞も、震災前と比べてメンバーが増えている団体が少なくありません。年1回の祭りだけではなく、結婚式や新築祝いなどで舞いを披露する機会が増えています。震災前と比べて、より一層、日常生活に密着し、地域根付いているように感じます」

「郷土芸能は伝統芸能ですが、必ずしも、固定したものでないことが重要です。変わらずに消滅してしまうのではなく、大槌町のように、変化しながら伝承されていく柔軟性が求められるのではないでしょうか」

池谷和信さん